

兒童研究法講義 (一)

第四高等學校教授

松 本 金 壽

技 術 と 精 神

—— 兒童研究法への序 ——

一
技術と精神との二極は、いつの時代にあつても、教育の凡ての體系に必須な要件であると思ふ。尤も此の二極は、その時々々の政治情勢や學界情勢に應じて、必ずしも常に平等な重みを與へられてゐることは限らないが、教育を技術のみに或は又精神のみに限ることは無稽であることは改めて説明を要しないところと思ふ。私がこれから何回かに互つて述べようとする兒童研究法の如きは、明かに技術に屬する問題ではあるが、私の趣旨とするところは單に技術の強調のみに止まらうとするものではない。それどころか、教

育の精神乃至はイデーを稱せられる理想的目標を適確に達成する爲の要件として、更には、よりよき理想的目標への前進を促す條件として、兒童研究法に對する正當な評價を期待し度いのである。

元來、兒童研究法そのものは、兒童への愛に出發し、兒童心性の獨自性の認識に由來してゐる。換言すれば、兒童教育をして成果的たらしめる爲の先人の限りなき熱情が、兒童心性の獨自性を發掘すべき研究法の誕生を齎したのである。それ故、本源に溯れば、兒童教育に關する優れたる先達は、同時に又、兒童研究法の創始者でもあつた。フレ

ーベルにしろ、ペスタロッチにしろ、彼等は教育の精神に不滅の光りを與へてゐる。共に教育の技術にも不朽の功績を遺してゐる。「兒童の中に兒童を」といふ最近の兒童觀も、研究法への撓ゆまざる精進の結果、發見されたものに外ならない。更に又、前世紀末から今世紀初頭にかけて、アメリカの教育界を風靡したスタンレイ・ホールの兒童研究運動が、研究法の不備の故に、忽ちにして凋落した事情等を思ひ合せらば、精神と技術との併行が如何に重要なものであるかといふことが知られるであらう。

二

以上は技術と精神とに關する極めて一般的な粗略に過ぎないが、次に私が此の序論において指摘して置き度い點は、我が學界における特殊事情についてである。

教育に限らず、明治以來の我が國の學術文化の殆ど凡ては歐米からの輸入によつてきた。その結果として、次々に輸入された學術文化は成果の吸收に重點が置かれ、斯る成果を齎した研究方法は従はざる傾向が少くなかつた。これを兒童研究の例について云ふならば、兒童心性に關する諸々の學說の紹介が主であつて、斯る學說が如何にして成立したかの發生の地盤・成立の手續は、さかく閑却視され勝であつた。ビネー・シモンの智能検査法もさきより、シュテルン、ビューレル、コフカ、ピアジュ、ソーンダイク等々、

從來我が國の兒童教育界に影響を及ぼした諸學者の見解も、研究方法といふ重要な過程を飛び越して、凡てその成果のみが直輸入され、我が國兒童の實際に當てはめられてきたかのやうに思はれる。そして、之等の諸學說が我が國の教育實際界において未だ充分な清算をみない中に、次々の新學說に移つてゆくといふやうな慌しい追隨主義が、遺憾乍ら從來の傾向であつたと思ふ。

勿論このやうな傾向は、過渡期日本の學界情勢においては止むを得ざることであつたに相違ないが、單なる學問としてよりは一つの實踐として、我が國独自の政治經濟事情に立脚して行はるべき教育としては、このやうな安易な行き方は充分反省されなければならぬ點だと思はれる。我々が常々、教育における實證主義を主張し、兒童研究法への自覺を促さうとするのも、斯る傳統的方针に警告を發し、日本教育の科學的建設を期待するからに外ならないのである。殊に、日支事變を契機として著しく進展した我が國の教育界は、東亞新秩序建設の一翼として様々な課題に直面してゐる。そして此の課題こそは、從來の如き歐米依存の態度を以てしては到底解決し得ない性質のものであり、自主的な研究態度を以て新なる創造力を縱横に發揮しなければならぬ。まさに日本教育界にまつての試練の秋であると思ふ。兒童研究法に對する私の志向も、一つには斯る時局

的課題に對する獨自の解明を所期してゐる。

このやうな考へ方は私の多年の抱負であつた。數年前に發表した「兒童論」(岩波講座「國語教育」所收)において、私は次の二様の意味において教育の實踐と兒童研究法との關聯を指摘して置いたが、今日もその所見に何等の變りはない。こゝに附記して序論の結びに代へて置かうと思ふ。

〔第一〕 兒童心理に關する數多くの成書の續出によつて、兒童心性に對する教育者の理解は著しく高められたであらうが、それにも係らず、我が國兒童についての研究が甚だ少く、教育の實踐に直接資し得べき科學的事實は未だ極めて貧弱であつて、問題の解明は寧ろ今後に委ねられてゐるに云つても過言ではない。斯る我が國學界の現状において、兒童研究法の意義は一層重大に云はなければならぬ。

〔第二〕 科學的知識は、常に何等かの意味において、研究法との關聯なしには充分なる理解を得ることが困難であるが、殊に、實際上の具體的問題の解明に際しては研究法の體得が一層肝要である。兒童の實際的取扱において常面する種々なる問題は、夫々の具體的情況に應じた獨自な解決を要するものであるから、他人の研究業績がそのまゝの形で適用され得ることは寧ろ極めて稀であつて、多かれ少

かれ、適應的な變容が必要とされるのが常である。研究法の體得による技術的知識及びそれに基く實踐的努力は、教育の實際にまつて絶えざる切要さを示すであらう。

幼稚園 託兒所 談話法 内山憲尙著

談話の専門家であると同時に、幼稚園の園長でもあられる内山先生の本書は、幼稚園の實際家にとつてどんなに良き指針であらう事は想像に難くないのであります。實際に手に取つて見ても益々嬉しくなつてしまひます。目次を一通り見ただけでも讀ますには居られぬといふ心持が起つてまゐります。御一讀を切にお奨め致します。(編輯部)

- 第一章 總論篇
- 第二章 談話の意義と範圍
- 第三章 幼兒童話の歴史と分類
- 第四章 各論篇
- 第一章 幼兒童話の組立
- 第二章 幼兒童話の與へ方
- 第三章 幼兒童話の言葉
- 第四章 幼兒童話の音聲
- 第五章 幼兒童話のセスチュア
- 第三 應用篇
- 第一章 繪噺の種類
- 第二章 立體的童話
- 第三章 人形劇
- 第四 整備篇
- 第一章 談話の配當
- 第二章 談話保育案
- 第三章 談話資料

發行所 東洋圖書株式會社
東京市神田區神保町一ノ六七
定價 壹圓六拾錢